

すてきな
この人たちの
笑顔物語

輝いて生きる！

定年後は人の役に立つ仕事をしたい…
白羽の矢を立てたのが、なんと美容師！

長年がんばってきた仕事もやりがいがあったけれど、退職後はまた別の人生を歩んでみたい。趣味というよりもっと手ごたえのあることを探したい。定年退職を前に、そんなふうを考える方も多いのではないだろうか。

藤田巖さんは、コンピューターメーカーの営業マンとして第一線で働き、58歳で定年を迎えました。

「ちょうどコンピューター業界が急成長した時期で、海外にも進出しようというのでブラジル勤務を経験するなど、販売の仕事に熱心に行っていました」
そんな藤田さんが、定年後の人生を考え始めたのは、50歳になったころ。

「定年後は関連会社に再就職するという選択もありましたが、自分の定年美



藤田さん愛用のハサミやくし、ブラシなどの道具。訪問美容にも持ち歩くので、ケースは年季が入っている。

56歳で美容師となり 送迎と出張を目玉にした 訪問美容の道を開く

美容師

藤田 巖さん

(71歳) 神奈川県



横浜市栄区にある福祉美容室「カットクリエイト21」は創業11年。地元では名前が知られる存在に。「べっぴんさんになりましたよ」という藤田さんに笑顔を返すお客さま。

学といましようか、第二の人生は金儲けではなく、何か人の役に立つ仕事ができないものかと考えたんです」

そこで、リタイア後の生き方についての講演会に行ったり、本を読んでみたものの、いずれも趣味や自己満足の世界を出ないと感じるものでした。

髪をきれいにするだけで お年寄りが元気になる！

そんなある日、偶然目にした新聞記事が藤田さんの心を強く動かしました。それは、高齢者施設で生活している92歳のおばあさんの話でした。どこも悪くないのに部屋から出ようとしなかったおばあさんが、美容師に髪をきれいにしてもらったら、うれしくて施設の中を元気に歩きまわったというのです。「すごいな、美容師ってお医者さんにもできないこと、心まで動かせるんだ」と。そのころ、母親が病院や施設を出たり入ったりしてしまっていて、髪の毛を見るとボサボサなんです。世話になった母親に何か恩返しをしたい。そんな思いもあり、美容師という仕事から離れなくなりました」

半年くらい美容関係の下調べをしているうちに、「よし、やってやろう！」と気持ちが高まったのですが…。



トップはくしとハサミでいねいに、襟足はレーザーでやさしく。女性が美しくなるのがうれしい。

美容専門学校入学から免許取得まで6年 60歳でオープンしたのは「福祉美容室」

「50代だし不器用だし、どうすれば美容師になれるのかわかりません。ただ私は以前、独学でマラソンのトレーニングをして、1年後にフルマラソンを完走したことがあるんです。そうだ、あのときみたいに自分にプレッシャーを与えてやってみよう。やらなければ人生に悔いを残す、と思いました」

藤田さんの座右の銘は「私の後悔することは、しなかったことに対してであり、できなかったことではない」という言葉。往年の大女優、イングリッド・バーグマンの名言です。

美容専門学校の通信制に申し込みに行き、2度断られたときも。ウィークデーは会社勤めをし、土日にインターンとして美容院に通ったときも。卒業後、実技の試験に2回落ちたときも。いつもバーグマンのこの言葉が背中を押してくれました。幾多のハードルを越えて、美容師の資格を取得したのは56歳のとき。定年まであと2年余りでした。ここで藤田さんは、介護ヘルパーの資格を取る勉強を始めます。「そのころ母親にがんが見つかりまし



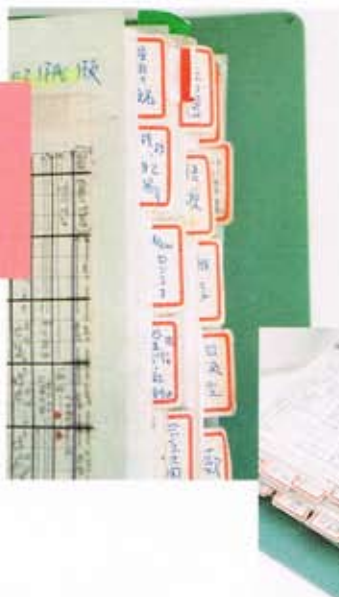
美容室は夜の7時まで。率先して後片づけをする藤田さん。このあと、事務的な仕事が山ほどある。

て。世話になった母親に恩返しをするには、介護の勉強をしておいたほうがいいと思ったんです」

そして、介護ヘルパー講座の施設実習で目にしたことが、藤田さんの進む道を決定的な事になりました。

「たまたま理容師の方が見えて、散髪をする日だったんです。見ると、女性なのにバリカンでバリバリとやられている。女性の髪は命より大切なもの。ていねいにやらなくてはいけないのに、とショックを受けました」

「60歳で美容室開店」をめざし12年計画を立て、手帳に細かく記入。血液型、歌などの項目には情報を書き込み、お客さまとの話のタネに。



美容師になり
福祉美容院を
手がけるまでの歩み

50

歳頃

定年退職後のことを考え始める
新聞記事を読み、お年寄りが歩きづつかけをつくれた美容師の仕事に感銘を受ける
やりたい気持ちが高まり、美容師になるための通信教育を受ける

51

歳

サラリーマンと二足のわらじで、年休をとりながら2年間のカリキュラムをこなす



コンセプトは出張と送迎 地道な宣伝活動が実って

そのとき脳裏に浮かんだのは、これまで勉強してきた美容と介護を合わせたら、60歳からでも十分に人の役に立てるのではないかと、ということ。

「そうだ、福祉美容という名前をつけてやってみよう」とひらめきました」

福祉美容とは、足が不自由だったり、高齢で来店できない方のための美容室。藤田さんは、出張と送迎の2つをコンセプトにして、店舗探しから始め、60歳の誕生日に福祉美容室「カットクリエイト21」をオープンしました。

このとき藤田さんが展開した宣伝活動は、地道かつ効果的なものでした。

「車の横や後ろに、送迎やります、出前カットやりますと派手に描いて、宣伝カーよろしく走りまわりました。もうひとつはポステイングです。チラシはサービステケットと一緒に封筒に入れて、カットクリエイト21です、よろしくお願いします、と声を出しながらポストに頭を下げて一軒一軒入れてまわり、それを何度も繰り返しました」
数か月たつと、少しずつ反応が見られ、そのいいねいな対応と便利さが、口コミで広がっていきました。

お店の広報活動の工夫あれこれ



送迎車のドアには、「出前カット大好き！ 送迎訪問サービス」の文字が。走るだけで宣伝になる。



ドアに「ホームヘルパー2級資格者の店」のステッカーを貼り、福祉美容室であることをアピール。



ポステイングは送迎&訪問カットを強調したチラシと優待チケットを封筒に入れて、目立つように。

現在

開業して11年。施設が150か所、定期的に行く在宅のお客さまが100名ほどに

62

歳
口コミで広がり、地元で評判に。施設からの依頼も増える

施設訪問が増え、出張専門の会社をつくる。ほかで働いていて、一時仕事を離れた美容師をスタッフに

60

歳
誕生日に開業、出張カットと送迎を行う福祉美容師としてスタート

ポステイングや声かけで説明、営業活動をする

58

歳
定年

イギリスのヘアカット専門校に2か月間留学

帰国後、美容院で2年間修業をする



56 53

歳
3回目の試験で資格取得

母親のことがあり、介護ヘルパー2級の資格を取る

このときの資格実習で施設でのカットを見てシヨックを受け、美容と介護の合体を思いつく

歳頃
土日にインターンを2年間やり、試験を受ける

ブランクのあった女性スタッフを雇い お年寄りの髪と心をリフレッシュ!

開店から2、3年の月日が流れるうちに、個人宅だけでなく、施設からの依頼も増えてきました。そこで藤田さんは、いまは訪問美容と呼んでいる、出張専門の「若蛙」という会社をつくることに。「若蛙」の美容師は必要に応じて、有料老人ホームやデイサービスセンターに、自宅から直接出向きます。

「ここで働く美容師は、子育てや介護で仕事を中断したけれど、また働きたいという人を採用しているんです」

これなら、女性たちが家庭を持ちながらでも、融通をきかせて働けます。

神奈川県川崎市にある有料老人ホームでの訪問美容の様子を取材させてもらいました。スタッフは藤田さんと2人の女性美容師、赤川明美さんと菊池裕子さん。おふたりとも介護ヘルパー2級の資格を持っているとか。

場所は、広い浴室の横にある脱衣所です。道具類はすべて持ち込み、棚や浴室のコナラーを借りてセッティング。10時から始まり、午前の部と午後の部に分けて予約をとり、車椅子の方は部屋まで迎えに行きます。

この日のスタッフは3名。「社長の講演を聞いてファンになり、押しかけました」と赤川さん(中央)。菊池さん(右)は「月に2~3回の仕事なので長く続けられそうです」と話す。



ったり、雰囲気づくりも忘れない。

姿見を持ち込み、椅子や道具をセットすれば、ホームの脱衣所が美容室に早変わり。手すりに花を飾るお風呂の脱衣所を美容院に

さっそくパーマの方、カラーリングの方から施術が始まり、カット希望の方も順番に入ります。感心したのは、藤田さんの対応のていねいさ。「始めさせていただきます」「髪の毛を濡らしますから、冷たいかもしれませんが」と、必ず言葉をかけて進めていくのです。「お耳が遠い方には、しゃがみ込んで、お耳のすぐ近くで、あまり大きくない



ホーム到着

美容道具一式を車に積んで、搬入。車のドアには「宅髪便」「出前美容室 若蛙」の文字が。



要望に応じて

パーマやカラーリングも手早くパーマ用のロッドを巻いていく赤川さん。仕上がりが楽しみ! 菊池さんはカラーを担当。ふたりともヘルパーの資格があり、お年寄りとの会話もスムーズ。



普通の美容室とメニューは変わらない

カットだけでなく、パーマやカラーリングもOK。町の美容室と同じようにお年寄りを迎えたい。



声でゆっくり話すようにしています」
カットが終わると、みなさんすっきりした様子。表情がやわらぎ、何歳も若返って見えます。

訪問美容を広めたいと 人材育成にも力を注ぐ日々

「訪問美容は時代のニーズに合ったひとつの流れです。お年寄りが居心地のいい、昔ながらの美容院は姿を消しつつあります。そこで、お体が不自由な方のために、送迎や出張のサービスを取り入れてリピーターを増やす。これはビジネスチャンスになると思います」

そんなふうに語る藤田さんの夢は、訪問美容が日本中に広がること。そのため、5年前にLLP（有限責任事業組合）「全国訪問理美容協会」を設立し、研修会を開いて、訪問理美容師の育成に力を注いでいます。

「もうひとつの夢は、おしゃれカードというのを作って、その地域でいちばん上手な美容師さんに髪をきれいにしてもらおうサービスをやりたいなと……」
「人の役に立つ仕事をしたい」という願いから始まった藤田さんの挑戦は、その緻密な計画とたゆまぬ努力によって大きく花開き、その花の数を次々に増やしているように思えます。



髪の長さやスタイルなどの要望を聞き、そのとおりにカット。車椅子の場合は、より気をつけて。



耳が遠いお客さまには、腰を落とし
耳元でやさしく話しかけます